

31. 心臓血管外科

心臓血管外科部長 内田孝之

2024年、心臓外科への若手医師の希望者減少に伴う大学からの人員派遣減少が続いた影響で当科スタッフは2023年に続き3人（血管外科を加えて4人）でした。さらに診療報酬改定、働き方改革への対応と難題に追われた一年でもありました。

このような状況でも急性期医療機関、かつ『筑豊の三次救急最後の砦』であり続けられるためにはマンパワー的に厳しい中でも新規技術の獲得、緊急治療体制の充実、を進めることは絶対条件です。

2024年はその中でも急性期病院としてのスピード感のUPの為、術後の早期回復、在院日数の短縮についてより重点的に取り組み、術後fast trackの推進によりICU入院期間、回復期間の短縮を進めた一年でした。

新規技術としては低侵襲心臓術(MICS)実施施設として、MICS僧帽弁形成術/置換術、大動脈弁置換術への積極的取り組み、経カテーテル大動脈弁留置術に関して2機種目の指導医資格取得へむけた技術向上への取り組みをすすめました。更に2023年より開始した抗凝固療法抗血小板剤使用困難心房細動症例への脳梗塞、全身血栓症の（再発）予防としての低侵襲胸腔鏡下左心耳閉鎖術も徐々に症例を重ねています。左心耳閉鎖術に関しては2024年末より地域の講演会、施設巡りによりその周知にも務めております。

当科診療実績において特筆すべきこととしては2006年より開始した大動脈弁ステント手術が胸部腹部合わせて1,000例を突破しました。大動脈ステント治療としてはさらにこれまで適応とならなかった胸部大動脈瘤に関してもsurgeon's modificationとしての枝付きステント導入による低侵襲治療も徐々に進めています。

手術件数は、経カテーテル大動脈弁留置術（TAVI）24件を含め人工心肺、心臓手術が165件、非開心術、大動脈ステントグラフトまで含めた心臓大血管手術が231件で特に心臓手術においてはほぼ前年同様の症例をご紹介いただきました。忙しいながらも充実した日々で皆様のご協力に感謝しております。

また、2024年8月31日、小都市の民間病院ながら、日本血管外科学会九州地方会を主宰させていただきました。九州地区の血管外科医が一同に集まる会であり、博多全日空ホテルで無事開催することができました。前年の産業医科大学から受けついだバトンが無事翌年の久留米大学外科教室へお渡しすることができ、ほっとしています。

2025年からはさらに働き方改革の影響から特に筑豊地域から北九州地域にかけて、心臓大血管の超緊急救命治療体制の危機的状況が進む危惧が高く、当院は産業医科大学、JCHO九州病院、小倉記念病院と連携した治療ネットワークの構築をより具体的に進めているところでもあります。

昔も今もどんな時代にあっても、心臓血管外科の常に変わらぬ大きな目標は、患者さん一人一人に応じたよりよい手術、治療の提供ができるような質の向上です。今年も『選ばれる高度急性期病院』の『選ばれる心臓血管外科』を目指して常に前へ、精進を続ける覚悟です。

今年も一年宜しく願いいたします。